「生まれつき幽霊」

林実歩

登場人物

樋口　菖（あやめ）（２４）　フリーター
松本伊吹（２０）　大学２年

吉岡まなぶ（４７）　お化け屋敷のオーナー

田中洋介（２０）　大学２年
小川康太（２０）　大学２年

立花あゆみ（１７）　客

カップルの彼氏
カップルの彼女
警察官
面接官
ビルの管理人
配達員

○お化け屋敷・中

ひたひたと歩く青白い足。

×　×　×

カップルが身を寄せて歩く。

樋口菖（２４）、２人の背後に立ち、呻き声をあげる。長い髪で顔が隠れている。

彼女「きゃあ！」

彼氏「この化け物！気持ち悪い。あっち行け！」

彼氏、彼女を守る。

菖、彼氏を睨み、突然２人に向かって走り出す。青白く恐ろしい顔が露わになる。

彼氏「うわー！」

彼氏、彼女をおいて走って逃げる。

菖、にやりと笑う。

○同・外観

彼氏、走って出口から出てくる。【呪いの館】と書かれた看板。

周りはゲームセンターや雑貨屋が並ぶアミューズメント施設。

○同・スタッフルーム

菖、入室。前髪を分ける。

菖、鏡に映った自分の顔を見て、ため息をつく。

菖M「お化け屋敷のお化け役。これが天職だなんて、最悪だ」

吉岡まなぶ（４７）、入室。

吉岡「菖ちゃんやっほー」

菖「吉岡さん」

吉岡「今日も相変わらず怖いねえ。はい。差し入れ」

吉岡、カラフルなマカロンを机に置く。

菖「また原宿行って来たんですか？」

吉岡「だってリサーチは大事じゃん？」

菖と吉岡、マカロンを食べる。

吉岡「でさ、新しくマカロンのお化けの人形とか作ったらどうかな」

菖「いやいや。忘れたんですか？この間も変なキャンディのお化け作って失敗したじゃないですか」

吉岡「あれは…あんなにすぐ流行りが終わるとは思わなかったんだもん」

菖、冷たい目を向ける。

吉岡「時代の変化にはついていかないと。うちなんて特に。これといったものが無いからさ」

菖「…私がいるじゃないですか」

吉岡、少し驚き、微笑む。

菖、思い出し笑いをし、吉岡の方に身を乗り出す。

菖「っていうか、さっきのカップルの男、ビビって1人で逃げて行って」

吉岡、身を引く。

吉岡「おお。…怖かった」

気まずい空気。

タイトル『生まれつき幽霊』

○《回想》高校・昇降口（朝）

菖、靴箱を開ける。上履きに線香が差し込まれている。

○お化け屋敷・中

菖、呻き声をあげて、客を追いかける。

○《回想》同・教室

花瓶の置かれた机。菖、それを呆然と見ている。

周りからクスクスと笑う声。

菖、手を握りしめる。

○お化け屋敷・中（夜）

客を追いかける菖。涙目である。

×　　×　　×

菖、見回りをする。
ふと足を止め、吊るされたボロボロの人形を見つめる。悲しそうに人形の頬に手を添える菖。
吉岡の声「菖ちゃーん。鍵閉めるから急いで」
菖「はい」
菖、電気を消し、小走りで出ていく。

○道（夜）
ひと気のない道を歩く菖。
通行人、菖にビビって声をあげる。菖、うんざりした様子で会釈する。

○菖のアパート・中（夜）
菖、ベッドに倒れ込む。
菖M「本物の幽霊は、ほとんどの場合、人の目に映ることはない」
菖「…私もそうだったらいいのに」

菖、布団を被る。

○《回想》道（夜）

T「２年前」

スーツ姿の菖、結った髪を解き、髪の毛で顔を隠す。

○《回想》ラーメン屋・中（夜）

菖、俯いて入店する。他に客はいない。厨房で野球の素振りをしていた吉岡、姿勢を正す。

吉岡「いらっしゃいませ」

菖「味噌ラーメンを」

吉岡「はいよ！」

菖、俯いたまま席に着く。吉岡、ラーメンを菖の前に置く。

吉岡「はい。味噌ラーメン」

菖、俯いたまま静かに手を合わせ、ラーメンを啜る。

吉岡、心配そうに菖を見る。

吉岡「それ髪の毛も啜っちゃってない？」

菖、動きを止める。麺を咥えたまま、

ゆっくりと髪の毛を両耳にかける。

濃いクマのできた青白い顔が覗く。

吉岡、ぎょっとする。

吉岡「ひっ」

菖、再びラーメンを啜る。

吉岡「…大丈夫？」

菖「え？」

吉岡「顔色悪いよ？」

菖「もともとです」

吉岡「もともと…」

吉岡、菖の鞄から飛び出した履歴書を

見つける。

吉岡「あー。俺も就活はうまくいかなくてね」

菖、吉岡を睨む。

吉岡「大体面接でその人を判断しようってのが間違ってる。嘘つくのが上手い奴ばっかり得するんだよ」

菖、吉岡を見つめる。

吉岡「社会は、真面目で正直な人に優しくないよね」

菖、次第に涙を零す。

吉岡「ええ！ちょっとどうしたの？」

慌てる吉岡。泣きじゃくる菖。

菖「私い、暗くて不気味だからあ…どこも受からなくてえ…」

吉岡「不気味って…」

菖「幽霊みたいだって、昔から怖がられてばっかりなんです」

戸惑う吉岡。ふと、思い立ったように、

吉岡「君さ、お化け屋敷興味ない？」

菖、不思議そうに吉岡を見る。

吉岡「お化け役で！働いてみたい、とか」

吉岡、小声で、

吉岡「実は僕、ここのバイト辞めて新しいことを始めたいと思ってて。いまいち踏ん切りがつかなかったんだけど、君がやってくれるって言うなら…ね」

吉岡、お盆に名刺を載せる。菖、涙を拭き、名刺を見つめる。

○お化け屋敷・スタッフルーム（朝）

菖、ドアを開け、部屋に入る。

菖「おはようございま…」

目の前に、松本伊吹（２０）の顔。笑っている。

菖「うわっ！」

伊吹「わあ！なんだ、びっくりした。本物のお化けかと思いました」

菖、驚いた様子で伊吹を見る。

菖「え？誰ですか？」

吉岡、菖の背後からやって来る。

吉岡「お。もう仲良くなってるね」

菖「吉岡さん。何ですかこの人」

吉岡「新人の松本伊吹くんだよ」

伊吹「松本伊吹です。今日からお世話になります！」

お化け屋敷に似合わない元気な声と、
張り付けたような笑顔。
ぽかんとする菖。
菖「新人？聞いてないですよ」
吉岡「バイト募集してた訳じゃないんだけどね。伊吹くんがどうしても働きたいって言ってくれて」
困惑した表情の菖。
吉岡「伊吹くんは遊園地で働いてたんだって」
伊吹、頷く。
吉岡「色々教えてあげてね」
伊吹「よろしくお願いします！」

×　×　×

伊吹と吉岡、楽しそうに話している。
菖、幽霊の化粧をしながら、２人を横目で見る。

×　×　×

菖、伊吹にお化け屋敷の全体図を見せる。

菖「吉岡さんは、お客さんが来たら受付に行って、私たちは交代でお化け役に入るから」

伊吹「分かりました！」

菖「待機してる間に化粧して、あとは何してもいいよ」

伊吹「はーい」

菖、そそくさと部屋を出る。伊吹、目を輝かせて化粧道具を手に取る。

○同・裏口（夜）

菖、荷物を持って歩く。伊吹、後ろから駆け寄る。

伊吹「菖さーん！」

菖、肩をすくめ、振り向く。

伊吹「帰るんですか？」

菖「…うん。どうかした？」

伊吹「菖さんとお話ししたくて。すごく怖がらせるのが上手だから。僕も菖さんみたいなお化けになりたいです」

菖「…嬉しいけど、何も教えられることはないよ」

伊吹、菖の顔を覗き込む。

伊吹「わあ。すごいですね、この顔色！生きてるのに死んでるみたいで！普段何食べてるんですか？」

菖、顔をしかめる。

菖「伊吹くんさ、なんでここで働こうと思ったの？」

伊吹、きょとんとしている。

菖「そんなに元気で明るいんだから、もっと合う仕事ありそうだけど」

伊吹「どういうことですか？」

菖「お化け役なんて怖がられるばっかりで、客に馬鹿にされたりもするし、嫌われ役なんだよ」

伊吹「そんなことないですよ！」

菖、鼻で笑う。

菖「よく言うよ。怖がったじゃん。私のこと」

菖、歩いて行く。伊吹、菖の後ろ姿を見つめる。

○同・中（日替わり）

伊吹、物陰で待機する。

立花あゆみ（１７）、恐る恐る歩いて来る。

あゆみ「最悪。なんでじゃんけん負けたかなあ」

伊吹、勢いよく飛び出し、あゆみを驚かす。

あゆみ「きゃあ！」

あゆみ、腰を抜かし座り込む。

あゆみ「もう無理…やめてお願い」

あゆみ、すすり泣く。伊吹、居た堪れなくなる。

微笑んで手を差し出す伊吹。

伊吹「ごめんね。もう脅かさないから、一緒に出口まで行こう」

あゆみ、きょとんとする。

×　×　×

あゆみ、伊吹につかまって歩く。

伊吹「僕も1人で待機してる時ちょっと怖いんだ」

あゆみ「ふふ、そうなんですか？」

伊吹「あとは鏡に映った自分を見てびっくりしちゃう」

あゆみ「あはは」

菖、スタッフルームから駆けつける。

菖「何してんの？」

あゆみ「きゃあ！」

伊吹「菖さんストップ。怖いのダメなんです」

菖「は？」

伊吹「（あゆみに）はい。出口だよ」

あゆみ、顔を上げる。

あゆみ「あの、一緒に写真撮ってもらえませんか？」

伊吹「いいよ」

あゆみと伊吹、スマホで自撮りをする。

怪訝そうに見る菖。

あゆみ「ありがとうございます」

伊吹「どういたしまして。バイバイ」

あゆみ、お化け屋敷を出る。

菖、納得いかない様子。

菖「勝手なことしないでよ」

伊吹「ごめんなさい。つい可哀想になっちゃって」

菖「可哀想なんて思う必要ないでしょ。自分で入ってきたんだから」

伊吹「でも、入ってからやっぱり無理だったってこともあるし…」

菖「あのさ、客に同情するならお化け役向いてないと思うよ。私たちは怖がらせるのが仕事なの」

伊吹、悲しそうに目を伏せる。

○同・スタッフルーム（日替わり）

吉岡、慌てた様子で菖にスマホの画面を見せる。

吉岡「菖ちゃん！見て見てすごいよ」

お菓子を食べている菖、スマホを受け取る。徐々に目を見開く。

菖「これ…」

あゆみのＳＮＳ。伊吹とのツーショットと共に「怖くないお化け屋敷、最高！」という投稿。

菖「（投稿読み上げ）怖いのが苦手な私を、お化けのお兄さんが出口まで案内してくれました…」

いいねやコメントがたくさん付いてバズっている。

菖、焦った表情でスクロールする。

菖「こんな形で話題になったら、うち…」

吉岡「いやー、伊吹くんに感謝だね」

菖「え？」

吉岡「やっぱり今の時代、集客に大事なのはＳＮＳ！しかもお客さんが発信してくれると信憑性が高いんだよなあ」

菖「いやいや、うちのお化け屋敷は怖いのが売りでしょ？」

吉岡、適当に。

吉岡「んー？そうだね」

○菖のアパート・中（朝）

菖、朝食を食べながら、驚いた顔。

テレビのワイドショーで、あゆみの投稿が紹介されている。

菖、ムシャクシャした様子でテレビを消す。

○お化け屋敷・外観（日替わり）

人だかり。出勤してきた菖、あ然とする。

【怖くないお化け屋敷】というポップな看板。菖、人をかき分け、走って中に入る。

○同・中

電気がついて、風船で飾られた内装。伊吹の前に列ができている。伊吹は客と楽しそうに話し、写真を撮っている。

菖、受付の吉岡に駆け寄る。

菖「ちょっと、これ、どういうことですか」

吉岡「おー菖ちゃん」

吉岡、菖の方を見ずに接客しながら、

吉岡「時代の変化にはついていかないと」

信じられないといった顔の菖。

× × ×

菖、客とツーショットを撮る。髪の毛で顔を隠し、あたふたと接客している。

○同・スタッフルーム（夜）

菖、机に倒れ込む。

菖「はあ…死ぬかと思った」

伊吹「菖さん大変そうでしたね」

吉岡、ＰＣをいじる。

吉岡「ねえすごいよ！今までで一番の売り上げだ」

伊吹「やったね吉岡さん」

菖「明日からいつも通りに戻しますよね？」

吉岡「いや？明日からもずっとこれだよ」

菖「え、何言ってるんですか。こんなのお化け屋敷じゃない」

吉岡「それが良いんだよ。他には無い斬新でユニークなお化け屋敷」

菖、吉岡を睨む。吉岡、鼻歌を歌っている。

菖「ああ！」

菖、机を叩く。肩を揺らす吉岡。

伊吹、心配そうに菖を見る。

○大学・廊下

移動する学生達。伊吹、１人で歩いている。

○同・講義室

講義が終わり、退出する学生たち。

伊吹、隣の田中洋介（２０）にノートを差し出す。

伊吹「写真撮っていいよ」

田中「え？あ、松本くん」

伊吹「寝てたでしょ」

田中、スマホでノートの写真を撮る。

田中「見られてたかー」

伊吹、微笑む。

小川康太（２０）、通路から田中の肩を叩く。

小川「どうした？」

田中「…なんでもない」

小川、伊吹を一瞥する。

小川「行こうぜ」

田中と小川、講義室を出ていく。ノートをしまう伊吹。

○同・講義室の前

田中と小川、並んで歩く。

小川「松本と仲良いんだ」

田中「やめろよ。隣に座ってただけだよ」

小川「あいつってなんか怖いよなー。人間っぽくないというか」

○お化け屋敷・中

伊吹、客と仲良さげに話している。

菖の前には誰も並んでいない。菖、伊吹を睨む。

○菖のアパート・中（夜）

菖、鏡の前でぎこちなく笑う。

菖「はあ…」

○お化け屋敷・スタッフルーム

菖、驚いた顔。空になったロッカー。
菖「吉岡さん。私の衣装は？」
吉岡、振り向く。
吉岡「ああ。今日で辞めてもらうよ」
菖「え？」
吉岡「この頃の菖ちゃんの仕事ぶりを見ていたら当然だと思うけど」
菖「冗談ですよね？」
菖、吉岡に詰め寄る。吉岡、真っ直ぐ菖を見る。
菖「待ってください。急にやり方が変わったから、まだ上手くできないだけで…」
吉岡「変化に対応できない人は、僕の店には合わないと思うんだ」
菖「本気なんですか？ここの立ち上げから今まで協力してやって来たじゃないですか」
吉岡「それは感謝してるよ。でも僕がずっと菖ちゃんの面倒を見る義務はないでしょ。僕は君のお父さんじゃない」
菖「そんな…」

吉岡「菖ちゃんは、僕に甘えすぎだったんじゃない？」

菖、吉岡を睨む。

菖「…呪ってやる」

吉岡「へ？」

菖、部屋を出ていく。

○同・裏口

伊吹、出勤してくる。俯いて出てくる菖とすれ違う。

伊吹「菖さん」

菖、振り向かず歩いて行く。伊吹、菖を追いかける。

伊吹「もう帰るんですか？もしかして体調が良くないとか？」

菖、伊吹を無視して歩く。

伊吹「僕がお客さんと話す時に気をつけてることとか、まとめてきたんです。よかったら参考にしてください」

伊吹、鞄からノートを取り出し、菖に
差し出す。
菖「うるさいんだよ！」
菖、ノートを叩き落とす。伊吹、驚く。
菖「伊吹くんはいいよね。みんなに好かれて、
どこ行っても上手くいくでしょ」
菖、泣きそうな顔。
菖「私の人生こんなのばっか。あんたみたい
な人に全部奪われる」
菖、走って行く。呆然とする伊吹。

○遊園地・事務所（日替わり）
菖と面接官、向かい合って座る。面接
官、菖の履歴書を見ている。
面接官「うーん。顔はいくらでもメイクで幽
霊っぽくできるからなあ。それよりうちは
スタッフ同士の関係を大事にしててさ」
菖「それは大丈夫です。前の所でも仲良くや
ってましたし」
面接官「じゃあなんで辞めたの？」

菖「…方針が合わなくて」
面接官「ふーん。他にアピールポイントはある？」
菖「私、どれだけお客さんに罵られても、化け物扱いされても平気です。昔から怖がられることが多くて、慣れてるので」
面接官、つまらなさそうに履歴書を見る。菖、焦って、
菖「あと私、人への恨みは人一番強くて、怖がらせたいって気持ちは誰にも負けないと思います」
面接官、ため息をついて履歴書を置く。
面接官「お化け役ってさ、お客様を楽しませるお仕事なんだよね。時にはお客様を安全に非常口まで誘導してもらうこともあるから。お客様のこと、敵対視しないでほしいなあ」
菖、返す言葉もなく。

○同・裏口（夜）

菖、履歴書を破る。

菖「うるさい…うるさいうるさい！」

菖、ぐしゃぐしゃと頭を掻く。髪の毛で顔が隠れる。

面接官の声「お疲れ様でした」

菖、振り返る。面接官、菖と反対側に歩いて行く。

ゆらゆらと面接官に近づいて行く菖。

○お化け屋敷・スタッフルーム

吉岡、スマホで動画を見ている。伊吹、化粧をしている。

伊吹「すっかりお客さん減っちゃいましたね」

吉岡「ねえねえ、これ見て」

吉岡、伊吹に画面を見せる。動画サイトに投稿された、男性が廃墟を訪れる動画。

吉岡「幽霊が出る廃墟だって。この動画すごいバズってんのよ」

伊吹「へえ。お化け写ってますか？」

吉岡「うーん」

吉岡、動画を停止して、拡大する。髪の毛で顔が隠れた菖が写っている。

吉岡「うわ。これ写っちゃってんじゃん」

伊吹、目を凝らして画面を見る。

○廃墟・中（夜）

近づいて来る足音と話し声。

白いワンピースを着て物陰に隠れる菖。

ニヤニヤする。

菖「（唸り声）うう…あああ…」

○道（夜）

菖、コートでワンピースを隠して走っている。声を出して笑う。

○大学・食堂

伊吹、昼食を食べる。スマホで廃墟の動画を見ている。真剣な表情。

○廃墟・外（夜）

廃墟の中に入ろうとする菖。

警察官の声「君」

菖、動きを止める。警察官、菖を懐中電灯で照らす。

警察官「この廃墟に幽霊が出るって、興味本位で来る人が毎晩うるさいと近隣の方から通報が入ったんだよ」

菖、狼狽える。

菖「それは、大変ですね」

警察官「君でしょ。君が幽霊のふりして悪ふざけしてたんじゃないの？」

菖「違います」

警察官「違いますって。どう見ても幽霊でしょその格好」

菖「いや、これは…」

警察官「身分証見せてくれる？」

菖、後ずさる。突然、菖の肩に手が置かれる。

菖、振り向く。と、伊吹の顔がそこにある。

ぎょっとする菖。

伊吹「ここにいたんだ」

菖「なんで…」

伊吹「言ったでしょ？僕の家はここじゃなくて、もう一個先の道！」

警察官「この子の知り合い？」

伊吹「友達です。これから僕の家で仮装パーティなんですよ」

菖、伊吹を見つめる。

警察官「なんだ。紛らわしいことしないでくれよ」

菖「す、すみません」

伊吹「早く行こ行こ。みんな待ってるよ」

伊吹、菖の背中を押して歩いて行く。

○カラオケ・中（夜）

薄暗い部屋。ミラーボールが回る。

菖と伊吹、間を開けて座る。

菖「なんであそこに？」

伊吹、山盛りのフライドポテトを食べる。

伊吹「絶対菖さんだと思ったんですよ。噂のお化け」

菖「…答えになってない」

伊吹「ずっと菖さんのこと探してました」

伊吹、メロンソーダを飲む。

菖、怪訝そうに伊吹を見る。伊吹、フライドポテトを差し出す。

伊吹「よかったら食べてください」

菖「うん。ていうか私のお金だし」

伊吹「だって僕が来て助かったでしょ？」

菖「…そうだね。ありがとう」

伊吹、マイクを差し出す。

伊吹「歌いますか？」

菖「いい」

伊吹、マイクをいじる。

菖「怖くないお化け屋敷は順調？」

伊吹「ああ。今日辞めてきました。次はアイスクリーム屋さんで働こうと思ってます」
菖「え？辞めた？」
伊吹「はい。菖さんは何味が好きですか？アイス」
菖「なんで辞めたの？」
伊吹「なんでって…なんでですか？」
菖、目を見開いて伊吹を見る。
菖「何のために私が辞めさせられたと思ってるの？」
伊吹、首を傾げる。菖、伊吹の肩を掴む。
菖「あんたが！あんたのせいで！めちゃくちゃになったんだよ！お化け屋敷も私の人生も」
伊吹、驚いた顔。
菖「あんたにとっては遊びだったかもしれないけど、私にはあれしかなかった！」
伊吹「そんなこと…」

菖「私、お化け役だけは誰にも負けないって思えた。他の全部がダメでも。やっと見つけたのに…」

伊吹、少し俯く。

伊吹「…ごめんなさい」

菖、気まずそうに手を離す。

伊吹「僕、自分勝手なんですよ」

菖「え？」

伊吹「人生って意外とあっという間だし、明日元気に生きてるかも分からないから。やりたいことやって、誰に恨まれたとしても、死んじゃったらそんなの関係ないし」

菖、驚いた顔で伊吹を見つめる。

伊吹「だから、面白そうなこと全部やりたいって思うんです」

菖「…それで、お化け役のバイトを？」

伊吹「はい。菖さんに憧れて、お化け役やりたいって思いました」

菖「なんで私なんか…」

伊吹「僕は、自分の良い部分しか、人に見せられないんです。だから、コンプレックスを武器にしてる菖さんが羨ましかった」

菖「…そんなんじゃないよ」

伊吹「え？」

菖「武器にしてるとかじゃない。普通にアイス屋さんとか遊園地で働いて、笑顔で接客できる方がいいよ」

菖、自嘲的に笑う。

菖「私、お化け役しかできないんだよ」

伊吹「それって、そんなに悪いことですか？お化け役の才能があるってことですよね」

菖、驚いた顔。

菖「ねえ、伊吹くんは、私のこと不気味だと思わないの？こんな近くにいて呪われたらどうしようとか」

伊吹「（笑って）だって菖さんは本物の幽霊じゃないでしょ」

菖「そうだけど…」

伊吹「それに、嫌なんですよ¥。ちょっとでも誰かのことを悪く思うのが。そういう自分がいるのが許せないんです」

菖「そっか。それは…なんか…」

伊吹、フードメニューを見る。

伊吹「お腹空きましたね。ここ、ピザとかあるんですかね」

菖「…ある…」

伊吹「え？どこですか？」

伊吹、メニューを裏返してピザを探す。

菖「やりたいことがあるんだけど」

○お化け屋敷・外観

客が1人もいない。幽霊の姿をした吉岡、受付で頬杖をつく。

吉岡「暇だなー」

○同・裏口（夜）

菖と伊吹、曲がり角から覗く。

伊吹「ワクワクしますね」

菖「…勝手に行動しないでね」

伊吹「はい！」

菖「声でかいって」

吉岡、出てくる。菖と伊吹、目を見合わせる。

○道（夜）

吉岡、歩く。菖と伊吹、１０メートル程離れて尾行する。

○吉岡のアパート・外観（夜）

吉岡、部屋に入る。

菖と伊吹、忍び足で吉岡の部屋の前へ。

伊吹「どうやって怖がらせます？」

菖、チューブの血糊を取り出す。

×　×　×

血糊がべったりと付いた菖の手。

菖、吉岡の部屋のドアに手形をつける。

伊吹「すごい。これはびっくりしますね」
伊吹、血糊を指につけ、ドアに絵を描く。
菖、伊吹を見て笑う。
菖「伊吹くんって意外と悪い人だね」
伊吹「え、本当ですか？」
伊吹、嬉しそうに笑う。

○同・部屋の前（朝）
吉岡、血糊のついたドアを見る。
吉岡「きゃあ！」
吉岡、怯えた顔。
吉岡「何？これ…」

○お化け屋敷・スタッフルーム
吉岡、ＰＣを操作している。電話が鳴る。
吉岡「お。久しぶりのお客さんかな？はい。呪いの館です」
電話口から唸り声が聞こえる。

吉岡「もしもし？」

電話の声「おじさん…あそぼ…」

吉岡「ひい！」

吉岡、勢いよく受話器を置く。

○電話ボックス

菖、受話器を持ってニヤっと笑う。

伊吹、電話ボックスの外からグッドサインをする。

○１００円ショップ・中

菖と伊吹、幽霊のマスクを物色する。

カゴの中にホラーグッズがたくさん入っている。

○道（夜）

菖と伊吹、幽霊のマスクをつけ、吉岡を尾行する。

通行人が２人にビビる。

○菖のアパート・中

菖、封筒にチラシを入れる。

内職しながら、真剣にホラー映画を見て、時々メモをとる。

○大学・講義室

伊吹、荷物をまとめている。田中と小川、やって来る。

田中「松本くん」

伊吹、振り向く。

伊吹「どうしたの？」

田中「お昼一緒に食べない？」

伊吹「え？」

伊吹、嬉しそうに笑う。

伊吹「うん。食べよう食べよう！」

小川「俺ら後で行くから食券買って席取っといて」

伊吹「分かった！」

○道（夜）

菖、ホラーグッズの入った袋を持って立っている。スマホで時間を確認し、周囲を見る。

×　×　×

同じ場所でしゃがむ菖。スマホで時間を確認し、ため息をつく。

菖「…どうせすぐ飽きると思ってた」

菖、歩き出す。

○お化け屋敷・スタッフルーム

吉岡、ビルの管理人と話している。吉岡、クマができてげっそりした顔。

管理人「このまま売り上げが伸びないようだったら、残念だけど今月いっぱいで…」

吉岡「…分かりました」

管理人「顔色が悪いけど、大丈夫？」

吉岡「お客さんは来ないし、怪奇現象は起こるし、もう最悪ですよ」

管理人「怪奇現象？」
吉岡「家に手形がついてたり、ずっと誰かに
見られてる気がするんだ」
管理人「ストーカーですか？」
吉岡「誰がこんなおじさんのストーカーにな
るのよ。幽霊ですよ幽霊」
管理人「（笑って）幽霊か。お化け屋敷のオ
ーナーともなると幽霊に呪われるんだなあ」
吉岡、管理人を睨む。

○吉岡のアパート・前（夜）
吉岡、荒々しく歩く。
吉岡「何だよあのオヤジ。ムカつく！」
吉岡の部屋の前に人影が見える。
吉岡「ん？」

○同・部屋の前（夜）
菖、虚ろな目でドアに血糊を塗る。
吉岡「コラ！何してる！」
菖、振り向く。

吉岡「きゃあ！お化け！」
吉岡、腰を抜かす。
菖、目を丸くし、手が震える。
吉岡「お、お化けだろうと関係ない！人の家にこんなことして、タダで済むと思うなよ」
吉岡、菖に近づく。菖、咄嗟に逃走する。
菖「…ごめんなさい！」

○菖のアパート・玄関（夜）
菖、家に入り、ドアにもたれる。息を切らしている。口を抑えて座り込む菖。
菖「大丈夫…バレてない」

○同・中
カーテンが閉まった薄暗い部屋。菖、内職をしている。
インターフォンが鳴る。菖、肩を揺らし、息を呑む。

菖、恐る恐るインターフォンを確認する。

配達員「宅急便でーす」

菖、ほっとして力が抜ける。

菖「…置いといてください」

×　×　×

菖、届いた段ボールを開ける。中にはお化けのマスクが２つ。

菖、悲しそうにそれを見つめる。ふと、思い出したように、

菖「…アイスクリーム屋」

○アイスクリーム屋・中

菖、俯いて店員からアイスクリームを受け取る。

×　×　×

菖、テーブルでアイスを食べる。
店員のいるカウンターを見る菖。伊吹の姿は無い。

○大学・食堂

伊吹、３人分の昼食を机に置き、座っている。
田中と岡崎、やって来て、
田中「お待たせ松本くん」
岡崎「腹減ったー」
伊吹、少し俯いて笑顔を作る。

○道

菖、内職の段ボールを持って歩く。
ふと、向かいの歩道を見て立ち止まる。
目線の先、田中と小川、伊吹の前に立つ。
菖、咄嗟に電柱に隠れ、様子を伺う。
田中「ごめん。今月もピンチでさ」
伊吹、財布を持っている。

伊吹「大丈夫だよ」

小川、財布を取り上げ、中身を抜き出す。

小川「レポートは？」

伊吹「うん。やって来たよ」

伊吹、鞄を漁る。

菖、唇が震える。

菖M「本物の幽霊は、ほとんどの場合、人の目に映ることはない。私もそうなら楽だと思っていた」

伊吹、２人分のレポートを取り出し、田中と小川に渡す。

田中「（笑って）なんか変な日本語」

小川「これ、俺らがバカだと思われるじゃん」

伊吹「あはは。そうだね。ごめん」

伊吹、ぎゅっと鞄を握る。

田中「いやー本当松本くんがいてくれて助かるよ。これからも親友でいような」

伊吹「うん」

田中と小川、目を合わせてバカにしたように笑う。

菖M「でも、私はまだ幽霊じゃない。幽霊じゃないから、できることがある」

菖、走り出す。

菖、田中と小川に向けて段ボールを投げつける。段ボールが開いて封筒が宙に舞う。

伊吹、目を見開く。

田中「痛っ。何すんだよ」

田中と小川、振り返る。

そこには誰もいない。周囲を見る２人。

小川「え？…風で飛んできたのか？」

田中と小川、伊吹の方を向き直す。

と、すぐそばに菖の顔。菖、田中と岡崎を睨んでいる。

田中「うわあっ！」

田中と小川、腰を抜かし、怯えた顔で菖を見つめる。菖、ゆっくりと口角を上げる。

小川「で、出たー！」
田中と小川、走って逃げる。
菖、髪を整える。
菖「ふう」
伊吹「菖さん」
菖、吹き出し、腹を抱えて笑う。きょとんとする伊吹。
菖「見た？今の顔。はー、やっぱり怖がらせるの楽しいな」
伊吹、微笑む。
伊吹「ありがとうございます。助けてくれて」
菖「どういたしまして。私が幽霊に似ててよかったね」
伊吹「そうですね。でも…」
伊吹、真っ直ぐ菖を見る。
伊吹「さっきの菖さん、僕にはヒーローに見えました」
菖「え？」
伊吹「初めて菖さんを見た時と、同じです」
菖、不思議そうな顔。

伊吹「たまたま、あのお化け屋敷から出てきたお客さんを見かけたことがあって。すごく楽しそうに笑ってたんです」

×　×　×

お化け屋敷の出口の前。走って出てきたカップルが笑い合っている。

それを見ている伊吹。

×　×　×

菖、驚いた顔。

菖「それって…」

伊吹「お化け屋敷って、怖いけど楽しい場所で、そこで過ごした時間は一生お客さんの大事な思い出になるかもしれないんです」

菖、ぱちぱちと瞬きをする。

伊吹「菖さんは、お化け役が嫌われ者だって言いましたけど、そんなことないって本気

で思うんです。誰かを幸せにできるヒーローなんだと思います」

菖、少し驚き、微笑む。

菖「私も、今はそう思う」

菖と伊吹、笑い合う。

○吉岡のアパート・玄関

菖、菓子折りを差し出し、頭を深く下げる。伊吹、その後ろに立つ。

菖「本当にごめんなさい！」

吉岡、驚いた顔。

菖「今まで吉岡さんにイタズラしてたのは全部私です。どうか警察には言わないでください！」

吉岡「…バレてないと思ってたの？」

菖、顔を上げる。

吉岡「あの時の声と顔で分かったよ」

菖「…怒らないんですか？」

吉岡「うーん。やった理由は大体分かるし、
僕にも非がないとは言えないし。ちょうど
２人に会いたかったんだよね」
伊吹「え？」
吉岡「また３人でお化け屋敷をやりたいんだ」
菖、浮かない顔。
吉岡「実は、今月中に売り上げが上がらなか
ったら、営業を辞めなきゃいけなくて」
菖「え、そんな…」
吉岡「でも、いい考えがあるんだ。今度は絶
対に上手くいく」

○お化け屋敷・外観（日替わり）
【リニューアル】の看板がある。
入り口の前に列ができ、賑わっている。
吉岡、受付をする。
吉岡「うちのお化け屋敷は怖さが選べるんで
すが、どうしますか？」

○同・スタッフルーム

菖と伊吹、幽霊の格好で座っている。

吉岡の声「怖いのお願いしまーす」

菖、立ち上がる。

伊吹「行ってらっしゃい」

菖、伊吹に笑顔を向け、部屋を出る。

○同・中

青白い足、だんだん歩く速度を上げていく。

菖、ニヤッと笑い、客に向かって走る。

おわり